



評論を読み、

自分の考えをもつ

筆者が教室にやってきた！



お茶の水女子大学附属中学校教諭
宗我部義則先生

二年生 (三十名)

芸術学者・批評家
布施英利さん

以前、小誌で、宗我部義則先生の「君は『最後の晩餐』を知っているか」(二年)を使った授業の模様をご紹介しました。(※1)

修復前と修復後の「最後の晩餐」を比較したり、裏切り者のユダは誰かを話し合ったり、生徒たちは評論の対象となる絵画を読み解きながら、筆者の考えを読み取り、さらに「筆者の考えについて自分はどう思うか」をまとめていきました。授業はたいへん盛り上がり、読者の先生方からも大きな反響をいただきました。そして、今回の特集ではなんと、筆者である布施英利さんが、宗我部先生の評論の授業を参観することに。筆者との交流を通して、生徒たちはどのように自分の考えを深めていくのでしょうか。

撮影：鈴木俊介



「君は『最後の晩餐』を知っているか」の筆者・布施英利さんと、生徒たち。

※1 「中学校国語教育相談室 No.69」(2012年9月発行)で、「評論の文章をどう教えるか」と題し、宗我部先生の授業を紹介した。小社ウェブサイトの「光村コミュニティ」(会員専用)で閲覧が可能。

評論を読む

単元名
使用教材

「君は『最後の晚餐』を知っているか」
(二年)

授業は全七時間。布施さんをお迎えするのは第六時です。そこに至るまで、第一時から第五時にどのような授業が行われたか、簡単に紹介します。

まず、第一時では、宗我部先生が生徒たちに「評論」という言葉の意味を辞書で調べさせ、「何ができれば、評論を『読めた』と言えるだろう」と投げかけました。生徒たちからは、「筆者が述べている新しい見方や考え方を読み取ること」「筆者が述

べていることに対して、『ふーん』でなく『へえ』と思えること」「筆者の考えに対して、自分の考えをまとめること」という意見が出され、この三つを、単元の学習目標に設定しました。そして先生は、「最後の晚餐」の修復前と修復後の画像を見せ、「どちらが修復後だろう」と生徒たちに質問。教室は大いに盛り上がり、教材文への関心が一気に高まりました。

そして、第二時では全文を通読。第三時では、「最後の晚餐」の絵に線を書き込んで遠近法を確認したりする中で、絵の魅力を実感させ、さらに筆者が「最後の晚餐」をどう評しているか、本文中の言葉を抜き出して考えさせました。

第四・五時では、これまでの流れを受け

て、次の三つの論点について、筆者の考えに共感できるのか、疑問に感じることはあるかなどをグループで話し合いました。

論点① 「最後の晚餐」は「絵画の科学が生み出した新しい絵」という布施さんの考え。

論点② 「かっこいい。」とは、どんな点がかっこいいのか。共感できるか。

論点③ 「本当の『最後の晚餐』は二十世紀の私たちが初めて見た」という布施さんの考え。

話し合ったことをホワイトボードにまとめていき、発表の準備を進めました。そして、いよいよ第六時です。

学習指導計画 (全7時間)

第1時

- ▶ 学習目標の設定
何ができれば評論が読めたことになるかグループで話し合い、学習目標を設定。
- ▶ 教材文への導入
「最後の晚餐」の二つの画像を見て、どちらが修復後のものか話し合う。

第2時

- ▶ 「修復」について知る
絵画の修復について、教師の説明を聞く。
- ▶ 教材文を読む
全文通読をする。

第3時

- ▶ 筆者の「最後の晚餐」に対する評価を読み取る
・「最後の晚餐」とは、どのような絵なのか、絵に書き込みをしたり、裏切り者のユダは誰かについて話し合ったりする中で、絵の魅力を考える。
・筆者は「最後の晚餐」をどう評しているか考える。「ズバリ述べている表現」を抜き出し、グループで話し合う。

第4・5時

- ▶ 自分の考えをまとめる
三つの論点について、グループで話し合い、自分の考えをまとめる。
- ▶ 発表の準備をする
話し合った内容をグループごとにホワイトボードにまとめ、発表の準備をする。

第6時

- ▶ 発表会
グループごとに発表をする。筆者から直接話を聞き、筆者が評論文に込めた思いや考えを知る。

第7時

- ▶ まとめ、学習の振り返り
自分の考えや、評論を読むコツをまとめる。



発表の準備をする生徒たち。

第1～5時の授業の様子は、小社ウェブサイトで詳しくご紹介しています。
「光村図書ウェブサイト>みつむらweb magazine > 授業レポート」からご覧ください。

授業レポート (第六時)

筆者が登場！

「わっ、布施さんだー！」「教科書に載っている写真と髪型が違う(笑)」。筆者の布施英利さんが教室に入るやいなや、生徒たちがじよめきます。



生徒たちに挨拶をする布施さん。

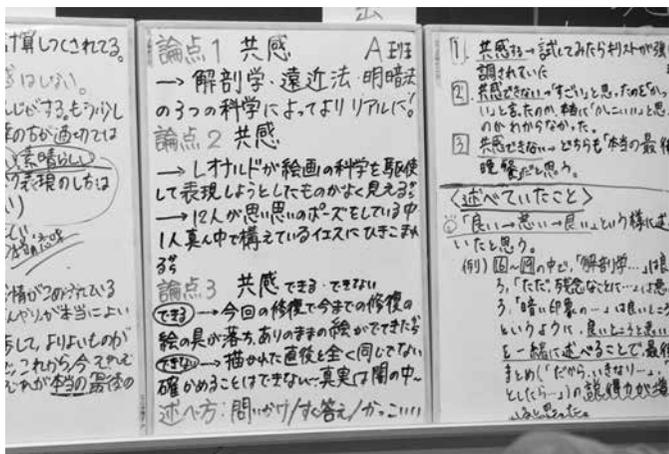
そして、宗我部先生があらためてご紹介。「布施英利さんは、美術に関する評論家として活躍されています。特に、解剖学の観点から美術作品を見ていくという分野では、日本で第一人者だそうですね。今日は、絵の見方なども教えていただけたいですね。」

先生がそう言うと、布施さんが「よろしくお願いします」と一礼し、生徒たちも「よろしくお願いします」と元氣よく挨拶。布施さんは、黒板の前に用意された椅子に座り、教室全体を見渡しなが、授業を参観します。

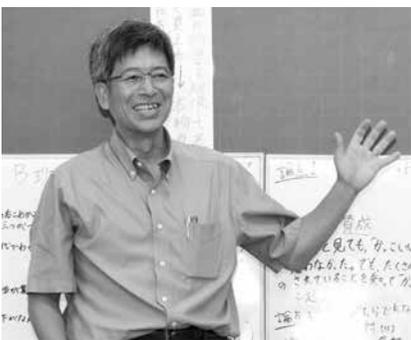
さっそく先生は、今日の授業の目標を確認しました。「これまで、三つの論点について話し合ってきました。今日は、グループごとにまとめた意見を発表してもらいます。それによって、グループとグループの交流もできますし、今日はなんと筆者の方との交流ができます。そういう交流を通して、自分の考えを深めていけたらいいですね。」

黒板には、各グループが前時までに話し合った内容が、ホワイトボードにまとめられ、ずらりと並べられています。

「それでは、論点①について発表したいと言っていたH班、口火を切ってください。」



グループごとに発表する内容をホワイトボードにまとめた。



「どんどん交流して、自分の考えを深めていきましょう」と宗我部先生。

特集
評論を読み、
自分の考えをもつ

論点①

「最後の晚餐」は「新しい絵」か？

H班は、「論点①『最後の晚餐』は『絵画の科学が生み出した新しい絵』という布施さんの考え」について、グループで話し合ったことを、次のように発表しました。

* * *

H班 布施さんは、解剖学・遠近法・明暗法などの絵画の科学を駆使しているから、それが今までなかった新しい絵だと言っています。私たちは「科学が駆使されている」という部分は納得できたんですけど、「新しい絵」なのかわからなくて。本当にそうなのかなって思います。

先生 なるほど。科学が駆使された絵だということには納得できたけど、「新しい絵」



「新しい絵」なのかわからない」と発表するH班。

論点②

「かっこいい」に「共感できるか？」

次に、「論点②『かっこいい。』とはどんな点がかっこいいのか。共感できるか』について発表していきます。前時で、この論点は「共感できる・できない」で、生徒たちの意見が大きく割れていました。さあ、どのような発言が飛び出すのでしょうか。

* * *

B班 私たちは「かっこいい」に共感できる場所もあるし、できない場所もあるって、すごく微妙です(笑)。科学的な技法がいっぱい使われていて、それは確かに「かっこいい」って思いました。でも、絵が完璧すぎて「かっこいい」というより、「怖い」って思いました。

先生 どうして「怖い」と思うんだろう。

B班 計算されつくしているところ。それから、キリストの足元の部分が不自然に塗りつぶされていて変な感じがしました。

先生 この部分だね(スクリーンに映し出された「最後の晚餐」の該当部分を指して)。では、他の班もひととおり発表していきましょう。

E班 僕たちも、科学が駆使されていると

かっこいいは、他を知らないからわからないということですね。他のグループ、論点①についてどうでしょうか。先日の授業では、共感できるというグループが多かったけれど、共感できるという人、手を挙げてください。

生徒 (ほぼ全員が挙手)

先生 じゃあ、論点①について、他のグループは納得しているということでもいいのかな。では、H班が疑問に思った「新しい絵」ということについて、ちょっと布施さんにお聞きしてみましようか。

布施 はい(椅子から立ち上がった)。レオナルド・ダ・ヴィンチは、ルネサンス時代の人です。ルネサンスという言葉には、「再生」や「新たに生まれる」という意味があるのですが、そのルネサンスを代表する画家がレオナルドなんです。今、「新しい絵なのか疑問だ」という意見が出ましたけど、確かにそうですね。レオナルドは、五百年前の画家ですから、今の皆さんから見たら、新しくはありません。

でも、時代を遡り、ルネサンス以前に描かれた絵画を見ると、子どもが描いたような絵ばかりなんです。信仰心があって、そういう意味では心が打たれる絵はあるのですが。

ころは、確かに「かっこいい」と思いますが、でも、修復後は、色が淡くて「かっこいい」というより「きれい」だなと思います。

先生 「かっこいい」よりも、他に合う言葉があるんじゃないかという意見ね。G班はどう？

G班 「かっこいい」という言葉は、表面的で軽い感じがして、私たちはもっと、すごみのある言葉のほうが適切だと思います。生徒 (一同笑い)

G班 例えば、「美しい」「すばらしい」「圧倒的だ」「圧倒する」とか、そういう言葉のほうが、この絵には合うんじゃないかって。「かっこいい」という言葉は、わかりやすいけど、本当に言いたいことが伝わらないんじゃないかと思います。



E班は「かっこいい」というより「きれい」だと思った」と発表。



「永遠に『新しい絵』なんじゃないかと、僕は思う」と布施さん。

それに対して、レオナルドは絵画の科学を駆使して「最後の晚餐」を描いた。それは、当時としては、さうとう新しかったと思います。

それと、僕はレオナルド・ダ・ヴィンチのファンなのであえて言いますけれど(笑)、この五百年前の絵は、今の私たちが見ても新しいと感じる部分があるんじゃないかなって思います。永遠に「新しい絵」なんじゃないかと。これは僕の主観です。

* * *

布施さんの説明にじっと耳を傾ける生徒たち。「新しい絵なのかわからない」と発表したH班の生徒たちも、深くうなずいていました。

先生 布施さんがちょっと苦笑いをされていますね(笑)。「かっこいい」ではなく、もっと重々しい言葉がいんじゃないかという意見か。そういう感覚、とても大事だよ。他の班はどう？

F班 私たちは、「かっこいい」に共感できるという意見です。でも、布施さんみたくに絵をパッと見たときには思わなくて、布施さんの文章を読み、この絵がさまざま工夫をされていることを知ってようやく「かっこいい」と思えました。

C班 うちの班は、ちょっと共感できないという意見です。私たちは全員、この絵を見たときに、「かっこいい」じゃなくて「すごい」って思いました。布施さんは「すごい」って思ったのを「かっこいい」という言葉で表したのか、それとも本当に「かっこいい」って思ったのか、そこがわからなくて。先生 なるほど。それは、後で布施さんにお聞きしてみたいところだね。

* * *

布施さんの「かっこいい」という表現について、「もっと適切な言葉があるんじゃないか」「本当に『かっこいい』と思ったのだろうか」と、生徒たちの議論がどんどん白熱していきます。そして、いよいよ論点③に移ります。

論点3 本当の「最後の晚餐」とは？

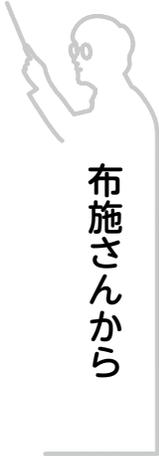
最後に「論点③ 本当の『最後の晚餐』」は、二十一世紀の私たちが初めて見た」という布施さんの考えについて、話し合っています。

* * *

A班 うちの班では意見が割れました。布施さんの考えに賛成の人もいるけど、絵が描かれた当時のほうが、レオナルドが表現したかったものが見えるんじゃないかという意見もあって。

D班 私たちは、布施さんに共感できないという意見です。絵が描かれた当時は、色が濃くて、細かい描き込みも見ることができて、それが、レオナルドの表現したかったものだと思うからです。

C班 うちの班は、どちらとも言えないという意見です。レオナルドは「芸術に完成はない」と言っていますよね（※2）。だから、描かれた当時の絵も完成したものでなかったのかもしれない。修復後の「最後の晚餐」も完成したものではないから、どちらが本当の「最後の晚餐」なのかは、わからないと思いました。



布施さんから

布施さんは、これまでの発表を受けて、生徒たちに向かって次のように話しました。

* * *

布施 皆さんの意見が、心にグサグサきました（笑）。まず「かっこいい」について話しますね。

僕が、実際にミラノへ行つて「最後の晚餐」の前に立ったとき、自然と「かっこいい」という言葉が自分の中から出てきました。それが、まず事実としてあります。でも、大事なのは、僕が本当に「かっこいい」と思ったかどうかではなく、その言葉を文章にするときに使うかどうかなんです。普通は、レオナルド・ダ・ヴィンチの絵に対して「かっこいい」なんて、失礼だし使いません。でも、僕はあえて使いました。それは、なぜかという、問題提起なんです。実際に今日、皆さんがさまざまに議論をし



「本当の『最後の晚餐』って、いったい何だろう」と、生徒たちに問いかける。

先生 本当の「最後の晚餐」って、いったい何なんだろう。

G班 前の時間に、修復前と修復後の「最後の晚餐」を見比べたけど、それぞれにいいところがありました。だから、どちらも本当の「最後の晚餐」だと言えるんじゃないかと思います。それから、今後も修復が行われてよりよい絵になるかもしれないし、本当の「最後の晚餐」はこれだ、つて言い切れるものではないのかもしれないとも思います。

先生 なるほど。修復作業の意味も含んでいるような意見だね。本当の「最後の晚餐」って、何だろう。もう一度、グループ

てくれました。うまいこといったなと思っています（笑）。

トルストイという小説家がこんなことを言っています。「優れた文学は、答えを与えてくれるのではない。問いかけを与えてくれるのだ」と。評論も同じで、答えを押し付けるものではないと思います。僕は「かっこいい」という言葉を使って、問いかけをしたんです。そこに答えはありません。答えは、皆さんが考えてください。

そして二つ目。これまで授業の中で「最後の晚餐」を何度も見てきたと思いますが、本当に「よく見て」いるでしょうか。ちょっとクイズをしたいと思います（笑）。

生徒 （一同じよめく）

布施 「最後の晚餐」の絵を見ないで答えてください。キリストは何色の服を着ていたでしょうか。服は二色で、下に着ている服と上に布をかぶせていたと思いますが、下に着ている服の色を答えてください。

（布施さんが、「赤色・青色……」と言いつ、生徒は自分が答えたと思う色で挙手）

で話し合ってみましょうか。

* * *

生徒たちは、これまでに出了意見を受けて、さらに議論を深めています。

そして、「最後の晚餐」は、どんなに手が加えられても一つしかない、「どの時代の絵も、本当の『最後の晚餐』だ」と思う。布施さんの言う「芸術は永遠なのだ」は、きっとそういう意味なんだと思う、「修復によって、その時代その時代の人の思いが乗せられて、『最後の晚餐』は完成に近づいていくのかもしれない」……などの意見が次々と出されていきました。

先生は、「本当の『最後の晚餐』とは何なのか、布施さんのお考えをお聞きしてみたいですね。そして、そろそろ時間なので、授業の講評をいただきます」と告げました。



他のグループの意見を聞く生徒たち。

※2 これまでの授業で、レオナルド・ダ・ヴィンチが言ったとされる「芸術に決して完成ということはない。途中で見切りつけたものがあるだけだ」という言葉を調べてきた生徒があり、その言葉を指している。

僕は「かっこいい」という言葉を使って、

問いかけをしたんです。 布施



評論を読み、自分の考えをもつ

初め、筆者がいらっしゃるので「答えを知りたい」と思っていました。でも、布施さんから「答えは自分自身で考えてください」と言われ、答えは自分で考えるもので、答えを「これだ」と限定して考えるのはよくないのだと思いました。



最初、描かれた当時の絵が、本当の「最後の晩餐」だと思っていたけれど、布施さんのお話を聞いたり、話し合いをしたりする中で、どの時代の「最後の晩餐」も、本当の「最後の晩餐」であると思えました。

話し合いの中で、「『カッコいい』という言葉でないほうがいい」という意見が出て、私も確かにそうだと思います。でも、布施さんが、あえて「カッコいい」という言葉を使ったということを知り、そういう布施さんが「カッコいい」と思いました。

この単元を学習する前、「最後の晩餐」について、特に何かを感じたことはなかったけれど、今はこの絵を「カッコいい」と感じます。違う絵を見ているような気持ちです。絵に対する気持ちが、どんどん変化していきました。

布施さんの言った「優れた文学は、答えを与えるのではなく、問いかけを与えるのだ」という言葉が心に残りました。これから、自分が文章を書くときに思い出したいです。

私は「カッコいい」よりもっと重い言葉のほうが良いと思っていた。でも、布施さんが「『カッコいい』を使って問いかけをした」とおっしゃっていて、私たちは、布施さんのねらい通り、話し合いをしていたんだと思いました（笑）。

これまで、評論は「自分の意見を述べるもの」と思っていたが、今回の授業を受けて、「自分の意見を読者が理解できるように伝え、自分の考えをもってもらうための文章」なのではないかと考えるようになりました。



生徒たちより

大事なのは、自分の目で「よく見る」こと。

布施

布施 答えは赤色です。赤色以外に手を挙げていた人もいますね。何度も絵を見てきたはずですが、はたしてどれだけ見ることができていたのでしょうか。自分の目で「よく見る」こと。実はこれが、美術について評論するときに、いちばん大事なことです。そういえば、さつき、キリストの足元が不自然に塗りつぶされている、って言った人がいましたね。誰でしたっけ？

生徒 はい、私です。なんか変だなあと。

布施 それは、たいへん鋭い視点です。というのは、この部分はレオナルドが描いていないんですね。レオナルドの絵が尊重されている時代には、ここに穴を開けて、扉をつくったんです（下写真参照）。その後、また穴を埋めて色を塗った。それで、こうなっているんです。だから、「なんか変だな」と思ったのは、鋭いですよ。

美術の評論に大事なことは、「よく見る」ことと、そうやって「どうしてそうなるんだらう」と考えることです。そして三つ目。僕は、細部が剥げ落ちた修復後の絵こそが、本当の「最後の晩餐」

であると思えました。それはなぜかという点と、レオナルドの絵について、細部の描き込みがすごいということは、すでによく言われていることなんです。だから、それに對して違うことを言いたかった。「細部でなく、全体の構成がすごいのだ」と。人と違うことを言われると、読者は気になつて引っかけますよね。そういう、いい意味で「脳に傷をつける」みたいなことが、文学や芸術の役割だと思っているので、僕は



不自然に塗りつぶされている部分を指し、「ここに扉があったんです」と説明する布施さん。

あえて、読者が引っかけを感じるように書いたんです。

* * *

生徒たちは、布施さんの言葉を聞き漏らすまいと、真剣な表情で鉛筆を走らせ、ノートに書き留めていきます。

「布施さんのお話、そして自分が気づいたことを、忘れないようノートにまとめておきましょう。まだまだお話を聞きしたいけれど、時間がきてしまいましたので、これで終わりにします。布施さん、今日は本当にありがとうございました」と宗我部先生が言い、大きな拍手で授業は締めくくられました。

図書館には特設コーナー

宗我部先生が司書の先生にお願いして、図書館に「君は『最後の晩餐』を知っているか」の特設コーナーを作ってもらいました。置かれていた書籍は次のとおりです。

- ・『レオナルド・ダ・ヴィンチ 復活「最後の晩餐」』（小学館）
- ・『よみがえる最後の晩餐』（NHK出版）
- ・『最後の晩餐の真実』（太田出版）
- ・『キリスト教名画の楽しみ方 最後の晩餐』（日本基督教団出版局）
- ・『ダ・ヴィンチの「最後の晩餐」はなぜ傑作か？—聖書の物語と美術』（小学館）
- ・『図説レオナルド・ダ・ヴィンチ 万能の天才を尋ねて』（河出書房新社）
- ・『レオナルド・ダ・ヴィンチ 時代を超えた天才』（BL出版）
- ・『国際関係がよくわかる宗教の本①ヨーロッパとキリスト教』（岩崎書店）
- ・『世界名画の謎 作家編』（ゆまに書房）
- ・『君はレオナルド・ダ・ヴィンチを知っているか』（筑摩書房）



授業を終えて

宗我部義則

「評論を読む」学習というと、「筆者の考えを読み取り理解すること」が目標になることが少なくないように思います。けれど、評論というのは「筆者は対象についてどんなことを言っているか」という内容だけでなく、どんな言葉で、どんな表現方法をもってその「こと」を伝えようとしているのか、筆者のレトリックに触れて、ある対象について「そう考える」筆者と、その対象について新たな知見・認識を得つつ、私は「こう考える」という読者とが対話するようなものではないかと思えます。だとすると、何が言いたいのだろう、本当はこう言いたいのではないか、私はこう思うのになぜ筆者はこう考えたのだろうか……そんなふうな問いを発しながら評論の文章に向かい合えたとき、私たちは評論を読んでいる（読めている）と言えるのではないかと思うのです。

今回はそんな考えのもとに、細部を精読

して筆者の考えを確かめながら読むのではなく、文章と絵に触れて生徒たちが感じた共感や違和感をベースに、まるで読書会のように仲間と話し合いながら、筆者が言いたいのはこうではないか、この絵のこういうところはこんな言い方で表しているのではないかと……と読む授業をやってみようと考えたのでした。そこへ筆者の布施さんが来てくださるといふ知らせ。筆者との対話が読者の自己内対話から、現実の書き手との対話になるといふ経験はそうできるものではないですね。布施さんに率直に自分たちの考えを伝え、布施さんのお話に楽しげに、また深くうなずきながら耳を傾ける生徒たちの様子を見て、とてもうれしく感じました。

布施さんが、「あえて人が言わない言葉で表して、読者に問いを投げかけたのだ」と評論の書き手の意図をかい間見せてくださったことは、生徒たちにとって、とても

大きな学びになったのではないかと思います。世に行われている文章、交わされる言葉には、表面上の意味だけでなく、「あえて」そう表す意図がある。評論の「書き手を読む」という読み方についても学び、考えるきっかけになったように思うからです。



そがべ・よしのり

1962年埼玉県生まれ。お茶の水女子大学附属中学校教諭。お茶の水女子大学非常勤講師。国立教育政策研究所「教育課程実施状況調査問題（中学校国語）」作成および分析委員。平成20年告示中学校学習指導要領解説国語編作成協力者。光村図書中学校「国語」教科書編集委員を務める。

授業を参観して

布施英利

評論でもエッセイでも、詩でも小説でも、文章を書くというのはたった一人の作業だ。同じく、文章を読むというのもたった一人の行為である。一人が一人に話しかける、それが文章というメディアだ。たとえ本が一万部売れて、読者が一人いても（十万人でも千人でもいいが）、それは一対一万ではなく、一対一が一万ある。ずっと、そう思って、三十年近く文章を書く仕事をしてきた。

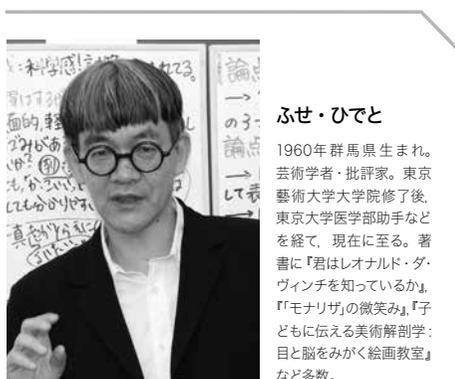
このたび自分の書いた文章を国語の教科書に載せていただいて、それを教材にした授業の現場を見る、という機会を得た。新鮮な体験だったのは「複数の生徒」が自分の文章を素材にしてディスカッションしている光景を目撃したことだった。一対一の世界とはちがう、集団（や社会）というもののなかにも文章は在る、という発見だった。ずっと、一人でパソコンに向かい（昔は原稿用紙に向かい）、文章を書いてきたが、国語の授業、という現場を拝見して、その

ことを教えられた。自分は、授業参観をしたのではなく、国語の授業を受けた、そんな教えられることも多い体験であった。国語の授業は、深い。

しかし最後に、やはりこうも書きたい。教室で生徒たちにも話したことだが、よい文章というのは、なにか答えを押し付けているのではなく、「よい問いかけ」をするものだ。文章の手法として、主観を押し付けているような書き方をしても、あくまでそれは「問い」にすぎない。異論、反論の呼び水となる、それも織り込んで書くのが評論だ。そこで、友だちと議論することはもちろんだが、その文章をきつかけにして、自分自身と議論する、自問自答する。それが文章を読む、ということの始まりでありゴールだ。

自分の考えをもつ。評論を読むということとはそういうことであり、評論を書くということも、そういうことである。たとえ声を合わせて文章を音読しても、それを声にし

て、耳にするのは、自分という一人の人間である。磨くのは、自分自身だ。授業も、そのためにある。授業を受けている生徒の、一人一人の目を見ながら、そう思った。やはり最後は自分、文章は一対一が基本なのである。



ふせ・ひと

1960年群馬県生まれ。芸術学者・批評家。東京藝術大学大学院修了後、東京大学医学部助手などを経て、現在に至る。著書に『君はレオナルド・ダ・ヴィンチを知っているか』、『モナリザの微笑み』、『子どもに伝える美術解剖学：目と脳をみがく絵画教室』など多数。